

フェヒナーにおけるモデルネの「きしみ」：グスターフ・テオドール・フェヒナーとその系譜(2)

福元, 圭太
九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門：准教授：現代ドイツ文学・思想

<https://doi.org/10.15017/19178>

出版情報：言語文化論究. 26, pp.1-21, 2011-02-07. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

フェヒナーにおけるモデルネの「きしみ」

— グスターフ・テオドール・フェヒナーとその系譜（2） —

福元圭太

1. 「魂は物理的に計測できるか」
2. フェヒナーの生涯
3. ロマン主義的自然哲学¹
4. 中間展望
5. 關
6. 『ナナ、あるいは植物の魂の生活について』

4. 中間展望

グスターフ・テオドール・フェヒナー (Gustav Theodor Fechner : 1801-1887) は、今日ではもっぱら実験心理学の鼻祖の一人としてのみ知られている。自らが創始者となった「精神物理学」(Psychophysik) においてフェヒナーが目論んだのは、心理学的なものを物理学的・数学的に測定することであった。この手法がのちの実験物理学へ継承されていくのである。心理学的なものの物理学的・数学的測定とは、極言すれば「魂 (Seele) の計測」、あるいは魂を自然科学的に翻訳することに他ならない。2009年の日本独文学会秋季研究発表会 (名古屋市立大学) におけるシンポジウム「神秘主義的世界観と自然科学——もうひとつのモデルネ」において筆者は、1. 「魂は物理的に計測できるか」、2. フェヒナーの生涯、3. ロマン主義的自然哲学、を論じ、フェヒナーの伝記を1820年代までたどりつつ、ローレンツ・オーケンのロマン主義的自然哲学とフェヒナーの邂逅までを追った。本稿はその後を受け、フェヒナーの1830年代以降の生涯と思想を跡付ける。主たる目的は、精神科学 (Geisteswissenschaft) の範疇に属する諸学 (哲学・当時の心理学・宗教学・神学等) と自然科学 (Naturwissenschaft) (主として物理学) のモデルネにおける分裂を克服し、その二つを一身で体現しようとした独特な思想家としてのフェヒナー像を浮き彫りにすること、換言すれば、神秘主義に限りなく近い「汎神論的・汎心論的思想家」であると同時に「厳密な実証主義的自然科学者」でもあろうとしたフェヒナーの思想的プロフィールを浮かび上がらせることにある。

当時のドイツにおける自然哲学 (Naturphilosophie) は、思弁的哲学の範疇に属しながら宗教学や神学とも境界を接していた。その意味で自然哲学は精神科学の一つに位置づけることができるであろう。したがってフェヒナーにおける精神科学与自然科学というテーマは、主として自然哲学と自然科学の関係をめぐる問題系となる。以下で手短かに19世紀前半におけるこの両者の思想的布置を確認しておきたい。

「自然は数学の言語で書かれている」² と言ったガリレオからデカルトを経由し、ニュートンによって完成された機械論的自然哲学は、特に18世紀フランスの唯物論者、ディドロやダランベールなどの百科全書派を通じて自然科学の精神的背景となり、哲学と科学が矛盾なく表裏一体となって

自然科学万能の時代を招来した。ニュートンの力学的世界像の徹底した数式化と理念化は、「ラプラスの魔」に象徴されるように、世界を計算可能性のうちに回収し、「グロテスクなまでに完璧に、世界に生起する現象を記述」³ できるという信憑を産むにいたった。ドイツにおいても自然科学は発展の一途をたどったが、自然哲学についてはフランス的な機械論が疑問視され、そのアルタナティブないしカウンターとして、シェリングやオーケンに代表されるロマン主義的・観念論的な自然哲学が勃興した。ドイツにおいてはつまり、「実証主義的自然科学」と「ロマン派の観念論的自然哲学」の間に葛藤が生じることとなったのである。

フェヒナー個人の中で起こっていたのがまさにこの葛藤であった。フェヒナーはつまり、ドイツにおける自然科学と自然哲学の葛藤を一身に体現し、その縮図となっているのである。極端な言い方をすれば、両者の葛藤の擬人化こそがフェヒナーなのである。この葛藤は、神なき⁴ 自然科学と、神学的ないし神智学的自然哲学の葛藤と言い換えることもできるであろう。このような思想史的地図の中にフェヒナーという風変わりな思想家を定位することができるのであれば、フェヒナーはもっと注目されてよい。

若き日に厳密な実証主義的自然科学の徒であったフェヒナーは、1820年ごろシェリング＝オーケン流の自然哲学に没頭する。フェヒナーはしかし、これらの自然哲学が自然科学的な知見や方法論とまったく相いれないことを見てとり、再び厳密な経験的・実証的な自然科学へ戻る⁵。しかるに1839年から43年までの4年にもわたる、生死の境をさまよう病から癒えてのち、フェヒナーは再び神秘主義的な自然哲学を説き始めるのである。フェヒナーは病気からの快復後、物理学正教授の地位を退き、哲学を講じながら多くの著作を発表するようになる。実証主義に基礎づけられた自然科学的「モデルネ」がアカデミズムを席捲していた時代に、フェヒナーは「植物の魂の生活」に関する美しい本を書き、あまつさえ地球や天体にも魂を認めることになるのである。

以下、第5章では1839年から約4年間にわたるフェヒナーの病気について論じる。また第6章では1848年に発表された『ナナ、あるいは植物の魂の生活について』という著作を検討する。

5. 闇

1834年10月3日、ライプツィヒ大学の物理学正教授に就任したフェヒナーは、翌1835年にドイツで初めてライプツィヒ大学に開設された物理学研究所（Physikalisches Institut）を率いるといった学務——多くは雑務——に追われることになる。また1834年から38年にかけては、8巻にもなる大部な『家庭用百科事典』（Hauslexikon）の主たる著者および編集者として、非常に多忙な日々を送っていた。この8巻本の百科事典のうち、驚くべきことになんとその3分の1はフェヒナー自身の筆になるという⁶。フェヒナーはこうして、厳密に自然科学的な学問的営為、物理学研究所を始めとする学務、徹底的に緻密かつ膨大な事典編集執筆の仕事などに文字通り忙殺されてしまう。もとより世界を一つの全体として捉え、その原理を解明しようとする自然哲学的思弁に没頭する癖のあったフェヒナーからは、そのような思弁の自由が奪われていったのである。体調に異常をきたしつつあったフェヒナーの症状は1839年のクリスマス以降ますます悪化し、頭痛や不眠は耐えがたいものになっていく。二度試みられた湯治も功を奏さなかった。

1840年、39歳のフェヒナーは、主観的色彩現象や光の網膜上の残像現象を解明するために、肉眼で太陽を見詰めるという無謀な実験を繰り返し、目をすっかり痛めてしまう。両眼失明の危機に陥ったフェヒナーは青いサングラスをかけるようになるが、やがては顔を布で覆い、最後には顔全体にブリキの仮面をかぶるようになって極端に光を避け、黒く塗られた部屋に閉じこもって4年に近い月日を過ごすことになるのである。その間極度の肉体的・精神的な衰弱に陥ったフェヒナーは

本能的欲求をできる限り拒絶し、まさに骨と皮だけになって生死の境を何度もさまよう。さまざまな食餌療法⁷や艾によるお灸などの「荒療治」(Roßkur)⁸も助けにはならなかった。たゆみなく大量の仕事をごなしてきたフェヒナーは、恐ろしいほどの退屈に苛まれることになる。フェヒナーはしかし、今日言うところの一種の「作業療法」を自ら編み出し、「糸巻き」(Garnwickeln)や蕪のひげとり(Rübenputzen)などをして⁹退屈や気持ちの落ち込み(Depression)を紛らしたという。肉体的・精神的危機はしかし容易には去らず、フェヒナーは幾度も死を願うようになる。フェヒナーをして死を思いとどませたのは、ひとえに妻の献身と、牧師の家庭に育ち、もとよりその素質を持っていた、したがって想起されたと呼んでもよいフェヒナー自身の宗教的感情であった。

もちろんそれを意図的に作り出すことはできもしないし、またそのようなことは許されてもいないのではあるが、宗教的な考えがある程度まで自ずと私の魂の中に芽生え、私の魂の中に沁みとおった。¹⁰

このような精神的な、また文字どおり光学的な「闇」のなかで、あたかも蛹のように約4年間もじっとしていたフェヒナーに、突如として奇跡が訪れる。1843年の10月初めから11月初旬にかけてフェヒナーの病状は一気に好転し¹¹、暗く閉ざされた部屋から室外へ、そして屋外へ、つまりは光の中へ帰還するのである。その最初の日は1843年10月5日とされている。2004年に刊行されたフェヒナーの日記には次のような記述がある。

10月5日

昨日次のような考えが浮かんだ。光に対する防御手段の一つである顔を覆う布は、黒い雲のようなものだ。もう一つのブリキの仮面は幼虫のようなものだ。しかし雲は結局は太陽を通してやるのだし、幼虫はそこから千の眼を持つ蝶が誕生する蛹と同じようなものだ。

昨日は目の前にかざした手を見ることができないほど私のまわりは真っ暗でなくてはならなかった。今日私は夕方5時半に、目を開けて戸外へ出た。庭の花々のなんと華やかなことか。¹²

4年にわたる暗闇での生活ののちに見た庭の花々の華やかさ——この体験は次章で取り扱う『ナナ』の執筆に直結している。『ナナ』の終わり近くでフェヒナーは、病が癒え始めた当時のことを思い出しながら次のように述べている。

あの〔病気からの快復の；筆者〕当初の残響があることは確かだ。そして私の目がかつて闇にとどめられ、そして突然再び光へと取り戻されなかったとしたら、この本(『ナナ』；筆者)はおそらく書かれえなかったであろう。¹³

病からの快復はフェヒナーにとってまさに第二の誕生、再生の体験であった。それは一種の神秘体験として、神からの召命感を呼び起こし、フェヒナーにとっての啓示となった。

確かなのは、私が神によって特別な使命に定められ、苦悩そのものによって私があるための準備をさせられていたのだということ、[...]全世界が以前とは異なった光のもとに現れたということ、そして今や世界の謎が解明されたように思われること、私のかつての存在は完全に消え去り現在の危機が新しい誕生であると思われたことを、私が当時信じたことである。¹⁴

フェヒナーの妹の一人には、その頃の兄が「恍惚の状態にある」ようで、「法悦の興奮に満たされている」¹⁵ ように見えたらしい。以降、医者も見離し、まさに半死半生であった重病人は、「バケツ単位」(eimerweise)¹⁶ でミルクを飲み、庭に出ては花を愛で、その名も「ローゼンタール」(バラの谷間) という、今もライプツィヒ市民の憩いの場となっている公園を散歩し始めるのである。

死の淵からの奇跡的生還が、フェヒナーがこののち神秘主義的世界観を大胆に展開していく重要な契機になったことは確かである。しかしながらこの一点のみをフェヒナーにおける「神秘主義的転換」とすることは、いささか性急である。というのもフェヒナーは、実証主義的自然科学と神秘主義的自然哲学を——その片方に比重が置かれる時期があるとはいえ——1820年代以来生涯を通じて並行して営んできたからである。例えばフェヒナーは、フランス人の物理学者ビオー¹⁷や、同じくフランス人の科学者テナール¹⁸の、規範的に実証主義的な自然科学の教科書をドイツ語に翻訳¹⁹しながら、1825年には『天使の比較解剖学』(*Vergleichende Anatomie der Engel*) というおよそ自然科学的とは呼べない小品を著している。また公式のアカデミズムの中で物理学正教授として勤務し始めて間もない1836年には、フェヒナーの著作中もっともよく読まれている『死後の生に関する小冊子』(*Das Büchlein vom Leben nach dem Tode*) を書いている。以上の2冊は、のちの『ナナ』、『ツェントーアヴェスタ、あるいは天空と彼岸の事物について』(*Zend-Avesta oder über die Dinge des Himmels und des Jenseits*; 1851) そして『暗黒観に対する光明観』(*Die Tagesansicht gegenüber der Nachtansicht*; 1879) といった、神秘主義的な自然哲学的著作の系譜に連なっていく。つまり『天使の比較解剖学』と『死後の生に関する小冊子』は、病気快復後にフェヒナーが展開した思想の萌芽が見られる点において、特権的な地位を占めていることになる。もっとも『天使の比較解剖学』と『死後の生に関する小冊子』²⁰、さらにその他の主として諷刺的な小品²¹を、フェヒナーは「ミーゼス博士」(Dr. Mieses) という匿名で発表している。これはおそらく、公式アカデミズムにおいては飽くまでも自然科学者として自己規定しなくてはならなかったフェヒナーの事情を反映しているものと思われる。しかし病からの快復後、フェヒナーは神秘主義的な自然哲学に関する著作も本名で発表するようになる。自然哲学と自然科学を車の両輪に、フェヒナーの筆はますます勢いを増す。植物の魂についての本『ナナ』の翌1849年には「有機体と有機的過程の数学的処理について」(„Ueber die mathematische Behandlung organischer Gestalten und Processe“) という自然科学の論文が書かれ、1851年の『ツェントーアヴェスタ』における万物賦霊論は、1860年に『精神物理学綱要』(*Elemente der Psychophysik*) の厳密な自然科学的著作において、いわば数学の言語に翻訳される。以上いくつかの例に見るように、本名、匿名の使い分けはあったものの、フェヒナーは一貫して神秘主義的傾向をもつ著作と経験的で実証主義的な自然科学の論文や著作を並行して書いてきた。したがって先述のように、病からの奇跡的快復がフェヒナーの「神秘主義的転換」であると、一意的に言うことはできないのである。

とは言え、これまでの記述から明らかなように、病とそこからの奇跡的快復が、晩年の神秘主義的思想展開への重要な契機になったこと、大きな「転換への契機」、つまり転機であったことは事実である。あるいは人生最大の転機であったと言うこともできるであろう。それゆえにフェヒナーの病気がはたしてどのような性質のものであったのかは、決して瑣末な問題ではない。

フェヒナーの病については様々な研究がある。フェヒナーの目の病は、器質的観点からすれば太陽光の凝視に起因するものと推測される。しかし4年にわたる暗室内への極端な引きこもりや生命力の減退には、器質的というよりは心理的な問題、おそらくは多分に鬱病的な傾向が与っていたと思われる。レニツヒ²²やハイデルベルガー²³の記述をもとに、フェヒナーの病に関するいくつかの研究を紹介する。

かつてフェヒナーの学生であったライプツィヒ大学の神経科医メービウスは、フェヒナーの病に *Akinesia algera* (無動病) という診断を下した (1884年)²⁴。これは運動からくる苦痛を忌避するための無運動症状 (*eine wegen Schmerzhaftigkeit der Bewegung gewollte Bewegungslosigkeit*) であるらしいが、光の忌避はそのなかでも例外的なケースとされている。メービウスはフェヒナーの無動病の原因を過度の精神的緊張に帰し、ヒステリーの一種であるとしている。

また、フロイトが主催する雑誌『イマーゴ』(1925年) に掲載された論文²⁵でイムレ・ヘルマンは、フェヒナーの精神的な病を典型的なエディプス・コンプレックスの枠組みで解こうとしている。フェヒナーの引きこもりは、解決されなかったエディプス・コンプレックスの現れとされるのである。5歳のときに父親を亡くしたフェヒナーは無意識のうちにそれに対する罪を感じていたとされ、自分の子供を望む気持ちが強かったことも指摘する²⁶。また暗室への引きこもりは子宮内への退行 (*intrauterine Regression*) と解釈され、新たに自分自身が産み出されるのを望んだとする。さらに光の極端な忌避は、太陽・光としての父親からの逃避であることなどが述べられる。

精神病の歴史を専門とするエランベルジェは、1970年フェヒナーを「心気症の症候を呈する重度の神経症的鬱病」(*schwere neurotische Depression mit hypochondrischen Symptomen*) と診立て、網膜の損傷がその症状をより複雑にした可能性を示唆している²⁷。

心理学者のプリングマンとバランスの二人はまったく逆の観点から興味深い説を提示している (1976年)²⁸。フェヒナーが常軌を逸するほど過重に機械論的で実証主義的な自然科学の仕事に自分を課したのは、感情的な問題から逃げるためであった、とするのである。その「感情的な問題」が何かは明確には特定されていないものの、その一つとしては、奔放不羈な、しばしばファンタジーの領域に越境するフェヒナーの哲学的思弁癖があったのではないかとされる²⁹。この観点は、フェヒナーの内面が自然科学と自然哲学の葛藤に引き裂かれていたことに焦点を当てる本論の趣旨にも合致する。フェヒナーもまた、それを支持する発言を残している。

私の内面はいわば二つの部分、自我と思考に分裂していた。両者は互いに闘っていた。思考は自我を打ち負かそうとし、我儘な、自我の自由と健康を破壊する歩みが続けようとしていた。[...] 私の精神的な活動は考えることにはなく、私の思考をつねに手なずけ、抑制することに費やされた。あたかもそれは、騎手が暴れ始めた馬の手綱を再び締めようとしているかのように思われたものであった [...]。³⁰

フェヒナーの思考法は「ひねくりまわし、元に戻り、深く穴をうがち、脳のなかをほじくりまわすかのようで、脳の状態がどんどん悪くなるような」³¹ ものであったらしい。奔放不羈な思考の翼も、度を過ぎれば苦痛となり、おそらくは不眠に陥らざるを得ないであろう。

医学史家クリスティーナ・シュレーダーと精神科医ハリー・シュレーダーも1991年、プリングマンらに近い分析をしている。フェヒナーはホーリスティックな世界把握 (自然哲学) と個別的で数学的・経験的な世界把握 (自然科学) との葛藤に苛まれていたとするのである。これは科学的方法論をめぐる葛藤であると同時に生身の人間の自己同一性に関する危機、すなわち「アイデンティティー・クライシス」であるとされる。フェヒナーがこの葛藤、分裂、矛盾を体現しているという本論の仮説はここでも支持されていると言えるであろう。ちなみに二人のシュレーダーはライプツィヒ大学の心理学者ヴァイゼの示唆を得て、病名を「慢性的な重圧と倦怠」(*chronische Überforderung und Erschöpfung*) から来る「のちに軽度躁的ないし躁的な方向への揺り戻しを伴う鬱病」(*eine depressive Psychose mit hypomanischer bis manischer Nachschwankung*) としている。躁

的な兆候とはすなわち、フェヒナーの妹が伝えている、奇跡的快復とともに訪れた恍惚と法悦の状態を指すのであろう。

以上フェヒナーの病に関するいくつかの研究を紹介したのも、フェヒナーの病名を確定したかったからではない。またそれが不可能でもあることは、上記のように種々様々な診断名が存在する事実からも明らかである。過度な仕事を病因とするもの、逆に過度な仕事こそ心理的な問題からの逃避手段であるとするものなど、相互に矛盾する診立てもある。共通しているのはしかし、フェヒナーの病が精神的なものであったという点である。目の器質的な病も心理的な快復とともにほとんど平癒していることから見れば、目の不調が何らかの精神的な不調に起因すると考えるのが自然であろう。もう一度本論の仮説を繰り返せば、フェヒナーの病は主として、そのアイデンティティが自然科学と自然哲学の葛藤に引き裂かれていたことによって惹起されたと言っているのではないだろうか。すなわち自然哲学におけるホーリスティックな世界把握や自然に対するある種の敬虔さが、日々進歩する分析的な自然科学によって浸食され、前者の有効性や価値観が否定されていく19世紀前半の「きしみ」を、換言すれば生氣論的(vitalistisch)で神秘主義的な世界把握と機械論的で唯物論的な世界把握との間に生じた軋轢を、フェヒナーの病は体現していたのではないであろうか。マッテンクロットはフェヒナーの病を「3年間にわたる神秘的な通過儀礼的受難」(dreijähriges mystisches Initiations-Martyrium)³³とまとめているが、それは一応のところ、実証主義的な自然科学の呪縛を脱し、神秘主義的自然哲学へと至る通過儀礼であったと解することができるであろう。「一応のところ」と言う理由は、先述したように、フェヒナーはつねに並行して自然哲学と自然科学を営もうとしていたし、後述するように、病後完全に神秘主義へと越境してしまったと言うことはできないからである。むしろフェヒナーの後期の著作の本領は、先走って言うなら、神秘主義的な自然哲学を経験的な自然科学によって裏付けようとした点に存する³⁴。もう一度マッテンクロットを引けば、フェヒナーはシェリングやオーケンとは異なり「自ら思弁しようとしたのではない。証明しようとしたのである」([...] selbst will er nicht spekulieren, sondern beweisen)³⁵ということになる。

次章では病気快復後最初のまとまった著作である『ナナ』を読み、神秘主義的ビジョンと自然科学的証明が独特に混交した後期フェヒナーの特徴を抽出することを試みる。

6. 『ナナ、あるいは植物の魂の生活について』

1843年5月17日、フェヒナーはライプツィヒ大学から正式に物理学講座の正教授職を解かれていたが、同時に600ターラー(のちに850ターラー)の休職給(Wartegeld)を支給されることになり、質素ながらも生活上の心配はなくなった。病から立ち直ったフェヒナーは1846年、再び講義を始めることになる。しかしもはや物理学の講座³⁶に戻ることはなく、自然哲学および人間学(Anthropologie)の教授として大学に復帰するのである。爾来フェヒナーは自分を、大学本体の構成員というよりは、「大学の単なる衛星」(nur als ein[en] Beiläufer der Universität)とみなしていたらしい³⁷。1846年の6月6日から始められた講義では、「至高の財」(das höchste Gut)、「究極の事物」(die letzten Dinge)、人間学、魂の所在(der Sitz der Seele)、肉体と魂の関係、精神物理学、美学等々が主題となる³⁸。このような問題圏に関するフェヒナーの執筆活動も旺盛をきわめることになるのだが、まずは1848年に『ナナ、あるいは植物の魂の生活について』が刊行されるのである。

先述したようにフェヒナーの神秘主義的自然哲学の著作は、『天使の比較解剖学』(1825年)にその萌芽を見、『死後の生に関する小冊子』(1836年)そしてこの『ナナ』を挟んで、『ツェントーアヴェスタ』(1851年)、『暗黒観に対する光明観』(1879年)という系譜を辿る。1861年に発表された

『魂の問題について』(Über die Seelenfrage) — この著作もまた神秘主義的自然哲学のリストに加えることもできる — に、フェヒナー自身もこの系譜をはっきりと意識していたことをうかがわせる、興味深い記述がある。学生時代に同部屋に住んでいた、寝起きの悪い学友のことを思いだしながら、5分ごとに「目覚めよ」と叫び、7回目には完全に起こすことに成功したと言うのである。自分の著作もこの「目覚めよ」に相当すると言う。

そのようにして私は、古い考え方のまどろみから抜け出すことのできない人々に対し、一度目は『死後の生に関する小冊子』をもって呼びかけた。「目覚めよ！」二度目は『ナナ』で呼びかけた。「目覚めよ！」三度目は『ツェントーアヴェスタ』で呼びかけた。「目覚めよ！」四度目は『月の本』³⁹で呼びかけた。「目覚めよ！」今私は五度目に呼びかける。「目覚めよ！」もし私が生きていれば、六度目、七度目になおも叫ぶだろう。「目覚めよ！」と。そしてこの「目覚めよ！」はつねに同じ「目覚めよ！」でありつづけるであろう。⁴⁰

『魂の問題について』で5度目に「目覚めよ」と覚醒を促したフェヒナーは、その後実際に六度目、七度目に相当するであろう呼びかけをすることになる。『信仰の三つの動機と根拠』(Die drei Motive und Gründe des Glaubens ; 1863) と『暗黒観に対する光明観』がそれである。

さて二度目の「目覚めよ！」である『ナナ』においてフェヒナーは、失明の危機、4年間にわたって暗がりに留まらねばならなかった精神的・肉体的危機、まさに聖書のヨブのような試練ののち、庭に出て花々を眺めたときに自らを襲った不可思議な感覚、神秘的な体験について次のように記している。

私は長年にわたる目の病ののち、初めて暗い部屋から目に覆いをかけず花咲く庭に出た時の印象をよく覚えている。その眺めは私には人間的なものを遥かに超えたものに見えた。花々は、あたかも自らの内なる光を外なる光へ投げかけるように、独特な清らかさで私に向かって輝いていた。庭全体が私には浄化されたもののように見えたのだが、それは私ではなく自然そのものが新たに生まれ出たかのようであった。⁴¹

フェヒナーは再び部屋に戻るのだが、そこが「どんどん明るく美しくなっていった。私は一挙に花々の外的な清らかさの源が内的な光であるに違いないと信じるようになった。[...] 当時私は、花そのものの魂の輝きを見たということを疑わなかった」⁴²と続けている。『ナナ』はこのように、先に引いた1843年10月5日の日記にしたためられた庭での体験が原風景となっているのである。

『ナナ』の冒頭、われわれはやや唐突な記述に出会う。

私がここに取りあげようとしている、極めて夢想的に見え、もっとも穏やかな自然の領域に住まう対象について語ることに、私自身が幾許かの懸念をもったということは告白しておかなければならない。というのも現在、時代に押し寄せる巨大な衝動が、きわめて平和的な者たちをも含めたあらゆる人々の注意と興味を圧倒的に要求しているからである。しかもその対象は、私が語ろうとしているものよりもずっと重要なものなのである。⁴³

フェヒナーがここで述べる「時代に押し寄せる巨大な衝動」(der großartige Drang und Gang der Zeit) に関しては、『ナナ』の発刊年を注意して見なければならない。1848年。フランスにおける2月革命

に端を発した革命の波はドイツにも押し寄せ、ザクセンの古都ライプツィヒにおいても3月革命が進行しつつあったのである。

1830年代に人口50000人を超えつつあったライプツィヒにも遅まきながら産業革命は到来し、徐々に工場が立ち始め、プロレタリアートも発生しつつあった。それに伴って台頭しつつあった商業資本家 (Handelskapitalist) らは、小邦分裂国家に代わる“リベラルな国民国家を希求しつつあった。しかし多数の大学教授を含むリベラル穏健派と、民衆を中心とするより急進的な民主派の間には、政治路線上の対立があった。政治とは全くと言ってよいほど縁のなかつたフェヒナーにも、否応なく時代の波は押し寄せた。特にフェヒナーの妻の実家であるフォルクマン (Volkmann) 家の男性たちや、フェヒナーの友人であり本の出版元でもあったヘルテル (Härtel)、また辞典類の出版で有名なブロックハウス (Brockhaus) らは、ライプツィヒにおけるリベラル派の中心的存在で、フェヒナーも一時期リベラル派の作ったサークルに参加している。

この時期のフェヒナーに関しては面白いエピソードがある。1849年5月にドレーズデンで民衆蜂起が起きた際、ライプツィヒからザクセン軍がエルベ河畔の古都に派遣された。この蜂起がライプツィヒに及ぶのを阻止するため、ブルジョワ・リベラル派の義勇兵が募られることになった。外見にも内面的にもおよそ兵士の典型とは対蹠的な、しかも病から回復して間もないフェヒナーも、街の秩序維持のために義勇兵の詰所へと向かったのであった。その際ライプツィヒには武器が払拭していたため、古風な長槍 (langer Speer) が配給されたという⁴⁵。フェヒナーの政治的姿勢は、ヘルテルらに比べて非常に保守的で留保つきのものであった⁴⁶。「改革」(Reform) に対しては理解を示したものの、また幼いころに父を亡くし、経済的に非常に苦勞をしたにもかかわらず、「転覆」(Umsturz) や社会主義的なユートピアについてフェヒナーは懐疑的であった⁴⁷。アーレントはフェヒナーの政治的保守性にはその自然観が影響しているのではないかと分析している。すなわちフェヒナーの保守性を、彼が進化論的に——もちろんダーウィンの『種の起源』(1859年) 以前にも進化論については多く議論されていた——「自由」よりも「必然」のほうが上位にあると考えていたこと、また自然は自ずと安定性 (Stabilität) を志向すると考えていたことに帰しているのである⁴⁸。フェヒナーはさらに、実質上大学からの休職給で生計を立てている、半ば年金生活者なのであり、「転覆」が自らの経済的基盤を危うくすることを承知していたのであろう。それにしてもフェヒナーが長槍をもって詰所に向かう光景は、喜悲劇的であると言わざるをえない。

いずれにせよ『ナナ』はこのような時代の喧騒の中に送り出された。フェヒナーは序文でこう続けている。

私は、これまでもっとも静かな時代においても決して聞かれなかった植物の囁きに、太古から根を張った幹をも引き倒そうとする風が吹き荒れるまさに今、耳を傾けることを要求しているのではないか […]⁴⁹。

しかしこのような喧騒の中でこそ聞こえる音もある。フェヒナーは「多くの聾の症状にあるように、小さな声は、同時に太鼓をやかましく鳴らせば鳴らすほどよく聞こえるということがあるものだ」⁵⁰ という一節をどこかで読んだことがあるという。

『ナナ』という書名は、ゲルマン神話における光の神バルドゥア (Baldur) の妻である花の女神ナナの名に由来する。フェヒナーがナナの名を読んだのは、ウーラントがまとめた古ゲルマン神話のトール神 (Thor) に関する記述においてであった。バルドゥアがナナを見染めるのは、神話のトボスと言えようが、ナナが裸体で水浴しているときである。ナナは露 (Tau) で水浴するのであるが、

いかにも花の女神に似つかわしい。バルドゥアの死に臨み、ナナ自身が悲しみのあまり張り裂けてしまう。これがのちに「心が張り裂ける」の神話的象徴表現として流通することになる⁵¹。

フェヒナーは序文の中で、光の神バルドゥアをめぐる古ゲルマン神話に仮託して、著作全体の目的を明らかにする。

[...] この著作の目的は、神によって遍く魂を付与された自然の中で、植物がこの入魂の一部を個別的に担っていることを再び明らかにすること、なかんずく植物と光の神バルドゥアとの交感を描写することにある。約言すればそれは、植物にそれ自身の魂を付与し、植物と光との交感を心理的に解釈する点にある。⁵²

「再び明らかに」したいという言葉から、フェヒナーがかつては植物有魂論が承認されていたと考えていることがわかる。フェヒナーはしかし、ウーラントにあるような、古ゲルマンの汎神論的世界像の単なる復古を期したのではない。「伝統の復古」にはその伝統に新たな息吹を吹き込むこと、すなわち逆説的にも「若返り」という契機が含まれる。フェヒナーは本のタイトルを「フローラ」(Flora) ないし「ハマデュラス」(Hamadyras) とすることも検討している。しかし前者は「あまりに植物学的」(zu botanisch) であるし、後者は「あまりに古典的で堅苦しい」(zu steif antiquarisch)。フェヒナーは書名を最終的に「フローラ」などではなく「ナナ」とした理由を次のように述べる。「ドイツ的な本質 (das deutsche Wesen) を今こそ若返らせ (sich verjüngen)、ふたたび自ら成長させるためにも [...], 年老いたロマンス系の異教の女 (die alte wälsche Heidin ; sic!) フローラはドイツの若い女神ナナに場所を譲らなくてはならなかった」⁵³。フランスにおける2月革命に端を発するドイツ3月革命の混乱は、植物の控えめな囁きをかき消し、病弱な学者でおよそ鬪争とは無縁なフェヒナーに長槍を持たせるにいたった。「フローラ」の排除にラテン的な要素の排除、ナショナルなものへの回帰を垣間見るといふ、政治的にうがった見方ができないこともない。いずれにせよナナの登場とともに、「故郷の精霊の世界」(eine heimische Geisterwelt) は「新たな開花期」⁵⁴ (neue Blütezeit) を謳歌することになるのである。

植物に魂を認めるか否か。これはフェヒナーにとって全自然観を、したがってまた神の概念⁵⁵を、つまりは全世界観を左右する決定的な問題であった。

植物に魂があるのか否かは、全自然観を左右する。またこの問いは他の多くの問いへの答えを決定する。この問いを肯定することによって自然の観方の全地平は拡大するが、肯定へと至る考え方の道筋だけでも、慣習的なものの観方へは回収されない視点を明るみに出すことになるのである。⁵⁶

序文に続く第1章でフェヒナーは、その章題そのままに、自らの「立場と課題」をより明確にしようとする。学問的な著作であればここで、魂とは何か、精神と魂はどう違うのか、肉体とは何か、神と自然の関係は、等々の概念規定が行われてしかるべきであることをフェヒナーは知っている。しかしフェヒナーの場合、そのような概念規定は極端に忌避される。ア・プリオリな上からの概念規定に対する嫌悪は、あらゆることを実験と計測によって経験的に確かめようとするフェヒナーの自然科学者の側面の表れであろう⁵⁷。このような概念規定の曖昧さは、経験を基礎とする形而上学を模索したフェヒナーの強みであるとともに、一般的な科学的方法論を取る論敵からは批判を招きやすい弱みともなっていた。フェヒナーは言う。

個別性や心理的統合、意識とその諸段階についてより厳密な規定を最初から利用するための基礎を構築するには、神と自然、肉体と魂の関係全般についての議論を先行させなければならないように思われる。それをもって初めてこの課題への取り組みのために徹底的な準備がなされたように見える。しかしこのような議論にすでに倦んでいない者がいるであろうか。またこのような議論でとどのつまり何か得るところのあった者がいたであろうか。⁵⁸

そのような概念規定の議論は、事柄を「清明な光のもとへ引き上げるというよりは、暗闇の中へ沈める」(ins Dunkel zu vertiefen, als an klares Licht zu heben)⁵⁹ ようなものである、と言われる。フェヒナーは「最初からこのような深さは放擲したいものだ」(… will ich lieber von vorn herein Verzicht auf solche Tiefe leisten)⁶⁰ と考えているのである。

フェヒナーはあくまで一般的な経験から出発し、それをアナロジーと帰納法で形而上のものへと繋げていこうとする。この方法は後代の哲学史において「帰納的形而上学」(induktive Metaphysik) と呼ばれることになるが、古典的な形而上学がア・プリオリな根拠からの演繹を原理とするのに対し、アナロジーと帰納法から出発して、例えば神を実証しようとする点において、フェヒナーのベクトルは下から上へ向いていると言うことができるであろう。しかしアナロジー的な方法は詩的ファンタジーや幻想、恣意や牽強付会と境界を接しており、たとえば植物学者のシュライデン⁶¹などは、フェヒナーの植物有魂論を手ひどく批判している。1850年代の初頭、大観衆を前にしたイェーナにおける講演会でシュライデンは、フェヒナーの『ナナ』における議論は「全くつかみどころがない」がために、論駁もできない手の、「実体のない霞のようなもの」(wesenlose Nebelbilder)⁶² と酷評したのである。シュライデンのような唯物論的自然科学の立場からは、フェヒナーの万物賦霊論は夢物語にしか思えなかったのである⁶³。

概念規定を忌避するもののフェヒナーは、『ナナ』という著作の果たすべき課題については、先述したように明確に意識していた。それは、果たして植物は個別的な存在として魂を持ちうるかという問題の解決であった。フェヒナーの取った方法は、植物がいかに動物や人間と似ているかを記述することにあつた。当時、人間はもとより、動物にも魂があるということは一般に承認されていた。フェヒナーの戦略はまず、動物と植物の間の境界を取り払うことにあつたのである。

詩的なファンタジーに満ちたアナロジーと自然科学的な議論が混交し、文体的にも晦渋な『ナナ』の個別的記述を前から順に追っていくのは得策ではない。『ナナ』に関するドイツにおける初期の研究においても、フェヒナーの個々の記述を追うのはかえって混乱を招くとされ、読解のための切り口が提案されている。ライゼリングの論⁶⁴で用いられている切り口は、植物有魂論の根拠づけを3つのカテゴリー、すなわち1. 自然科学的根拠、2. 倫理的・美的根拠、3. 目的論的・形而上学的根拠に分けて考察する方法であった。ここではそれを部分的に踏襲し、1. 自然科学的根拠、2. 美的根拠、3. 目的論的根拠に分けてテキストを渉猟する。

1. 自然科学的根拠

植物の魂の存在を自然科学的に根拠づけようとする際、フェヒナーが議論するのは以下の二点、すなわち感覚と心理的過程の担い手としての神経 (Nerven) とそれをつかさどる中枢の有無、ならびに恣意の発露としての自由で自発的な運動 (Bewegung) の有無の二点である。

多くの植物学者がフェヒナーを批判した論点は、感覚のためには神経が不可欠であるのに植物には神経がないという事実であった。つまり、神経がないところに魂はないというのである。フェヒナーは卑近な日常の風景から反論を始める。これは神経が繊維状であることをうまく利用した比喩

になっている。

もし私がピアノ、バイオリン、リュートからすべての弦を引きちぎるか、楽器自体を破壊してしまえば、これらの楽器からは音が出ない。それらを私は好きなようにハンマーで叩いたり、手でこつこつと叩いたりすることもできよう。しかしそれでは無軌道な雑音しか生じない。本来の音、ましてや音の旋律的あるいは調和的な連続ないし結合はまったく望むべくもない。同様にある種の弦を除去することで、ある種の音を出す能力は止揚される。すなわち明らかに弦が音を生み出す本質的な条件であると言うことができよう。弦はいわばこれらの楽器の神経に当たるわけである。そうであるなら […] フルートやピッコロ、オルガンは最初から音を出すこと、とりわけ旋律的で調和的な音の連続などは、それらにはもとより弦がないのであるから、不可能であるということになる。 […] 私には、神経がないにせよ、なぜ植物が主観的に感覚を生み出すことができないとされるのかが理解できない。動物がまさに感覚の弦楽器、植物が感覚のフルート状の楽器でありうるかもしれないではないか。⁶⁵

たしかに動物が弦楽器であり、植物が吹奏楽器であったとすれば、音を鳴らすためには弦が必要であるという一般則は成り立たないことになるであろう。しかしこの比喻自体が適切なものであるかどうかに関しては十分に議論の余地があるし、最後の文章をフェヒナーは、もっともなことに接続法 2 式 (Die Tiere könnten ja eben die Saiten-Instrumente, die Pflanzen Flöten-Instrumente der Empfindung sein.) でしか書くことができないのである。

フェヒナーは、「不可視の世界へ至る可視の世界の通路」という副題を持つ別の著作『魂の問題について』(1861年)でもこの問題を取り上げ、万物への賦霊という自らの主張を擁護しながら、感覚にとって神経が不可欠であるという主張は恣意的であると言う⁶⁶。たとえば犬や猫は足で走る。足をなくせば犬や猫は走れない。では足のないものは動けないのか。蛇やミミズは足がないのに動くではないか。同様に植物に神経がないからと言って感覚がない、魂がないとは言えない。したがって「動物にとって感覚するためには神経が必要である。植物には神経がない。したがって植物には感覚もない」というのは誤った推論である、と言うのである。

また、動物が神経を必要とする機能を、植物は神経なしで行っていることも指摘している。たとえば「呼吸や水分の循環 (Säftelauf) や栄養摂取、刺激に対する反応など」⁶⁷ である。植物には神経なくしてこのような機能が備わっているのであるから、神経なしでも感覚が可能であることは、あり得ないことではない、少なくとも植物に感覚がないことを証明することはできない、とされるのである。

フェヒナーはまた、すべての動物に神経はあるのかと問う。そして、たとえばポリュプ (Polyp) には感覚、運動、刺激に対する反応があるのに、神経がないではないか、動物にとっても感覚と神経は必然的に結びついているわけではないのだ⁶⁸と主張する。

中枢神経についてもフェヒナーは、たしかに植物には脳がないが、脳も繊維と細胞の集積にすぎないし、動物にも神経がないものもあれば、中枢である脳がなく神経のみが分布しているものもあるという。先ほどのポリュプを例にとって、「中枢と循環なしにこのように多くの自律的で相互に関連しあった感覚と恣意が可能である」のだから、「より多くのことがそれらなしでも可能になるはずだ」。というのもつまり「それら多くのことは、中枢と循環にはまったく結びつきようがないということなのであるから」⁶⁹と主張するのである。

以上のようにフェヒナーは神経⁷⁰とその中枢が魂にとって必然的であることを否定することに

よって、神経も中枢も持たない植物の有魂論を否定する論理を突き崩そうとしているのである。

また恣意的で自由な運動についてもフェヒナーは、『ナナ』の VII、VIII、IX 章において詳細な議論をしている。ここではそのアウトラインのみを示したい。古来よく知られている植物の運動は、ミモザの葉のお辞儀であろう。フェヒナーはしかし、この現象を強調することなく、より一般的に「動物の運動における意識の特徴的な現れとは何か」という問いを提出し、それは恣意的運動と自己決定性であるとする。植物には恣意的で自己決定的な運動は認められないであろうか。また動物の運動もはたして本当に恣意的で自己決定的と言えるのか。あるいは刺激に対する純粋に機械的な、また生化学的な反応にすぎないのではないかと問う。もっともこの問いは、「意志の自由」に関する永遠の問題、つまり自由と必然の弁証法に関する問いであり、明確な答えは導出しえないであろう。動物とのアナロジーでフェヒナーは、動物が不利な条件を避けて有利な方向へ運動するように、植物の根は生存に有利な方へ伸び、地上部は光へ向かって伸びることを指摘する。たしかに動物は位置を変える運動ができる。しかし植物も恣意的に枝葉を伸ばし、葉の表を太陽に向け、花は陽を追い、蔓は自在に伸びていくではないか。

また魂は、動物のそれのように活発でなければならないことはない、静かで動かない魂があってもまったく構わないのだという次のような文章には、有効な反論は見つからないであろう。

しかしなぜ走り回りわめき、ががつ物を喰らう魂に加えて、静かに花を開き、香り、露をすすって渴きを癒し、蕾を出すことでその衝動を、光へと向かうことでより高い憧憬を満たす魂があってはいけないのであろうか。私はそもそもなぜ、花開き匂うことよりも走り回りわめくことのほうがあらかじめ優先権を持っているのか、いまだに理解できない […]。⁷¹

このように述べた後、フェヒナーは「ミミズと勿忘草のどちらが私たちにとってより魂に満ちている (seelenvoller) と見えるだろうか」⁷² と問いかけてみせるのである。

要するにフェヒナーは、動物と植物の間に境界を定めることの困難さ⁷³を強調しているように思われる⁷⁴。フェヒナーにとって物理的 (physich) に区別がつかないものは、心理的 (psychisch) にも区別できないことになる。というのもフェヒナーの思考の根本的な前提条件は、物心並行論 (Parallelismus) にあるからである。物心並行論とは、物理的現象と心理的現象は同じコインの両面であるという考え方で、物理的な変化がなければ心理的な変化は生じない、また逆に心理的な変化があるところには必ず物理的な変化があるという考え方の原則をさす。より詳しく言えば、心理的なものは (当時としては) 特定の物質 (Materie)⁷⁵ に還元できないが、物質的 (materialistisch) である。なぜなら心理的なものも自然の一部を構成しているからである。自然の一部である以上すべてのものが物理的 (das Physische) なものから生じる (verursacht) わけではないにせよ、物理的なものによって条件づけられて (bedingt) おり、したがって物理的に説明可能 (erklärbar) なはずである⁷⁶。以上のような物心並行論は心理的なものの物理的計測、つまり「魂の計測」をもくろみ、精神物理学という新たな学問を創造して自然科学的心理学、すなわち実験心理学の基礎を築いたフェヒナーの基本イデーなのである。動物と植物が物理的に区別できないなら心理的にも区別できない、動物に魂があるなら植物にも魂があると考えるのは、フェヒナーにとっては十分に可能なアナロジーだったのである。

2. 美的根拠

植物有魂論は、美的にもそれを妨げる根拠がないばかりか、そのほうがより美的に望ましいこと

をフェヒナーは主張する。

森の生きている木々自身が魂の松明のように天に向かって輝いていると考えるほうが、それらが死んでただ我々のストーブを明るくしているだけだと考えるより、より美しく、偉大で、素晴らしくはないであろうか。⁷⁷

魂を持っているはずの植物をフェヒナーは擬人化し、それに感情移入する。我々は植物の繁茂を喜び枯死に同情をおぼえる。我々は花を心にかける。花々に我々がこんなに興味を惹かれるのはなぜであろう、「もしもそれらに豊かな魂がないとすれば」⁷⁸。また植物に魂がないとすれば、「自然には大きな埋め合わせることのできない空隙」(eine große unausgefüllte Lücke)⁷⁹ ができてしまうと言う。そのような荒涼たる世界の描写はほとんど詩人のそれに近い。

魂の国から植物が失墜してしまったのちの自然における感覚は、いかにまばらにばらまかれていることであろう。そうなれば鹿はいかに孤独に森を跋涉し、黄金虫はいかに孤独に花の周りを飛ぶことになるであろう。我々は自然がそのような荒涼たる場所でしかないと本当に信じなくてはならないのであろうか。神の生きた息吹が吹き通っている自然が。⁸⁰

フェヒナーにおける植物の擬人化は、ほとんど花占いの様相を呈するまでになる。バラは「咲き誇るような乙女」(das blühende Mädchen)、ユリは「清らかな、天使のような乙女」(das reine engelgleiche Mädchen)、チューリップは「うぬぼれた婦人」(die eitle Dame)⁸¹ といった具合である⁸²。内面は外見として表れる、魂の本質は見える形として顕現するという考え方は一種の性格学(Charakterologie)⁸³ と呼ぶことができるが、それが流行したロマン主義⁸⁴の名残をフェヒナーが留めていることの一つの証左となるであろう。

3. 目的論的根拠

植物の魂の存在が自然の合目的性を根拠として要請されるとすれば、それはすでに自然神学の問題圏に属することになるであろう⁸⁵。植物の存在理由がただ人間と動物に栄養を提供するのみであるなら、魂は不用であろう。そこには合目的性があるはずである(X, XI章)。動物や人間にとっての植物の有用性を、フェヒナーは分かりやすく列挙している。

植物がなくては全てのものが餓え、全てのものが救い難い状況に陥る。人間にパンもジャガイモも亜麻織物も木材もなく、したがって家も船も樽も火もなく、したがって冬に暖も鍋に火も金属を溶かす熱もなく、したがって斧も鋤もナイフも貨幣もなければどうなってしまうであろう。植物がなくては肉もミルクもウールも絹も筆となる羽も革もラードやヘッドもない。というのもこれらを動物はどこから得るといのであろう。そしてこれらすべてがなければ、人間には商業も手工業も芸術も文字も書籍も学問もないであろう。要するに人間にはただ命そのもののしか残らず、しかもすぐにそれもなくなってしまうであろう。⁸⁶

また動植物の互惠関係をフェヒナーは自然科学的観点からも考察している。植物は炭酸ガスから酸素を合成するが、動物が出す炭酸ガスこそが植物の栄養となるのであり、反語的に考察するなら動物こそ植物に栄養を提供するためにのみ存在すると見ることもできるのである。このような植物

と動物の物質交換 (Stoffwechsel) の考え方は、当時としてはまだ十分に議論されていない先進的なものであった⁸⁷。

フェヒナーは『ナナ』の最終 XVII 章で、本全体の主旨を10個の短いテーゼにまとめ、レジュメとしている。その4番目のテーゼがフェヒナーの目的論的 (teleologisch) な立場を余すところなく表現している。

4) 植物に魂がないとするよりはあるとするほうが、自然の総合的な目的論的観点にとってずっと満足のいくものである。というのも、もしそうでなければ死んでいるか無益にそこにあるだけの、自然における実に様々な関連や体制が、植物に魂があることによって生き生きとした内容豊かな意味を得るからである。⁸⁸

以上『ナナ』の内容を3つの観点から分析してきた。フェヒナーの懸念通り、革命の喧噪の中『ナナ』は出版当初ほとんど注目されず、ごく一部を除いてほとんど黙殺されたに近かったようである。反応があったにせよ、特に自然科学者からは、シュライデンの例に見られるように、その自然哲学的側面が批判を招いた⁸⁹。しかしながら——やはりと言うべきか——女性たちにはこぞって歓迎されたらしい⁹⁰。

『ナナ』は、1896年にフェヒナーの伝記を刊行したクルト・ラスヴィッツによって1899年に再版されると、はじめて注目されることになる。その後は1903年、1908年に矢継ぎ早に版を重ね、1921年には5度目の版が出版された。『ナナ』の受容史についてはインゲンジューブが詳細に報告しているが⁹¹、これについては紙数の関係で稿を改めなくてはならない。

『ナナ』が植物有魂論を実証したとは言えない。またそれは、どのような書物をもってしても実証されようがないであろう⁹²。本稿においても植物に魂があるかどうかは不問に付さざるをえない。本質的な問題は、それが成功しているかどうかはさておき、フェヒナーが自然哲学を自然科学によって根拠づけようと試みたことである。アーレントは、我々はフェヒナーに「納得させられたというよりは説得された」(eher überredet als überzeugt)⁹³と書いているし、フェヒナーを高く評価するマッテンクロットも、『ナナ』については「ほとんど三百代言の様相を帯びるまでになる」(bis zum Anschein von Rabulistik)⁹⁴と言う。たしかに『ナナ』には「部分的に極めて冗長な記述」(recht weitschweifige Ausführungen)⁹⁵があるし、「たぶん」(vielleicht)、「あるいは」(möglicherweise)、「どうしてそうでないわけがあるのか」(warum sollte nicht)⁹⁶、といった言い回しが頻出するのも事実である。一方、アードルフが言うように『ナナ』が「内なる感情の暖かみ」(innige Gefühlswärme)⁹⁷を感じさせる、どちらかと言えば女性的な慈愛に満ちた本であることも否めない。

フェヒナーは『ナナ』のあとも、自然哲学を積極的に展開しながら、それを自然科学的に根拠付ける構想を継続していく。1851年には『ナナ』で提示された人間および動物以外の生物への魂の付与、すなわち賦霊論を天体にまで拡大した哲学的な大著『ツェントーアヴェスタ』が上梓される。また1860年には『ツェントーアヴェスタ』で論じられた魂と物質の一元論的把握、あるいは心理的なものと物理的なものとの並行関係を、禁欲的なほど専ら数学的関数関係のみで表した『精神物理学綱要』が書かれる。『精神物理学綱要』は、『ナナ』と『ツェントーアヴェスタ』における思弁をまさに自然科学的に実証しようという意図をもって著されたのであるが、この書物がより厳密な「魂の計測」の、つまりはのちの実験心理学の端緒となるのである。結論を先取りして言えば、このような経過をたどってフェヒナーのなかの自然哲学と自然科学の「きしみ」は解消される方向へ向かうであろう。我々はフェヒナー晩年の1879年に発表された『暗黒観に対する光明観』において、こ

の特異な思想家の世界観が要約されているのを読むことになるであろう。

注

- 1 以上3項目については別稿で論じた。福元圭太：「魂の計測に関する試論——グスターフ・テオドル・フェヒナーとその系譜（1）——」『かいろす』47号、2009年、33-48頁所収。この論文については <https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/handle/2324/16171> から全文の閲覧およびダウンロードが可能なので、そちらを参照されたい。
- 2 『偽金鑑識官』（1623年）中にある言葉。ガリレオ：『偽金鑑識官』山田慶兒・谷泰訳、中央クラシックス、中央公論社、東京2009年、57頁。
- 3 村上陽一郎：『近代科学を超えて』講談社学術文庫、東京1992年、第10刷、117頁。
- 4 デカルトやニュートンが神を設定していないということではもちろんなく（それはまた事実でもない）、その思想の主要な部分が機械論的で因果論的であるという意味である。
- 5 すでに1821年にフェヒナーは、Dr. Mieses という匿名で書いた風刺的小品において、オーケンの自然哲学を茶化している。Vgl. Gustav Theodor Fechner: „Beweis, daß der Mond aus Jodine bestehe.“ In: *Kleine Schriften*. 2., unveränderte Ausgabe. Breitkopf & Härtel, Leipzig 1913. S. 12f. 1913年のこの第2版のために編集者（詳細不明）が付けたこの小品への「前書き」でも、フェヒナーがライプツィヒ大学の医学生であった1821年当時、1813年に発見された「ヨディーネ」（通常は「ヨード」と呼ばれる）が医薬としてもてはやされ始めた時期に相当すること、また当時は「シェリング＝オーケン流の自然哲学が、医学のみならず生理学の分野でも支配権を握っていた」ことが記されている。（Ebd., S. 2.）
- 6 Johannes Emil Kuntze: *Gustav Theodor Fechner. Ein deutsches Gelehrtenleben*. Breitkopf & Härtel, Leipzig 1892. S. 83. また Hauslexikon については以下の文献に詳しい。Hans-Jürgen Arendt: *Gustav Theodor Fechner und sein Hauslexikon 1834 bis 1838*. Hg. von der Gustav-Fechner-Gesellschaft e. V. Leipzig. Verlag im Wissenschaftszentrum Leipzig, Leipzig 1994.
- 7 フェヒナーの病気は1842年ごろには、ライプツィヒ市民の間でも噂になっていた。同年2月末のある日、妻の実家であるフォルクマン家の知人であるドーリス・ヘルヒャー（Doris Hercher）という女性が、フェヒナーの食欲減退を治すレシピを夢に見たと知らせてきた。そのレシピは実際にフェヒナーの食欲を徐々に取り戻すことに成功したらしい。それはスパイスの効いた生ハムに赤ワインとレモン汁をかけたものであった。Vgl. Hans-Jürgen Arendt: *Gustav Theodor Fechner. Ein deutscher Naturwissenschaftler und Philosoph im 19. Jahrhundert*. Peter Lang, Frankfurt a. M. 1999. S. 85.
- 8 Gerd Mattenklott: „Exkurs 1. Gustav Theodor Fechner.“ In: *Blindgänger: physiognomische Essays*. Suhrkamp, Frankfurt a. M. 1986. S. 149.
- 9 Petra Lennig: *Von der Metaphysik zur Psychophysik. Gustav Theodor Fechner (1810-1887). Eine ergobiographische Studie*. Peter Lang, Frankfurt a. M. 1994. S. 52.
- 10 Johannes Emil Kuntze: a. a. O., S. 116.
- 11 1839年に物理学正教授の職を辞さざるをえなかったフェヒナーには経済的な不安もあった。しかし1843年5月17日に600ターラー（のちに850ターラー）の「休職給」の支給が決まったことも、フェヒナーの精神的不安の解消と病気の快復に無関係ではなかったであろう。ライプツィ

- ヒ大学「フェヒナー協会」の会長であるマイシュナー＝メトゲ女史も筆者との会話の中で、非公式にはあるが同様の見解を述べられた。
- 12 Gustav Theodor Fechner: *Tagebücher 1828 bis 1879. Teilband I*. Hg. von Anneros Meischner-Metge. Bearbeitet von Irene Altmann. Verlag der Sächsischen Akademie der Wissenschaft zu Leipzig. In Kommission bei Franz Steiner Verlag, Stuttgart 2004. S. 250. 心やさしいフェヒナーは翌日（1843年10月6日）早朝再び庭に出て、手ずから花束をつくり、またバラを一輪妻のベッドに届けている。Ebd., S. 251.
 - 13 Gustav Theodor Fechner: *Nanna oder Über das Seelenleben der Pflanzen*. Leopold Voß. Leipzig 1848. S. 392f.
 - 14 Johannes Emil Kuntze: a. a. O., S. 125.
 - 15 Ebd., S. 140.
 - 16 Gerd Mattenklott: „Gustav Theodor Fechner. Ein deutsches Gelehrtenleben.“ In: *Fechner und die Folgen außerhalb der Naturwissenschaften. Interdisziplinäres Kolloquium zum 200. Geburtstag Gustav Theodor Fechners*. Hg. von Ulla Fix unter Mitarbeit von Irene Altmann. Max Niemeyer Verlag, Tübingen 2003. S. 16.
 - 17 Jean-Baptiste Biot (1774 -1862) はフランスの物理学者・数学者。19世紀初期に電流と磁力の関係を研究した。
 - 18 Louis Jacques Thénard (1777-1857) はフランスの化学者。過酸化水素の発見者で、陶磁器の染料となるコバルト・ブルーの産業生産化に成功。この染料はテナール・ブルー Thénards Blau と呼ばれることがある。
 - 19 フェヒナーは1824年、フランスの医学者ロスタン（Léon Louis Rostan; 1790-1866）の脳に関する医学書に続いてピオーの『実験物理学教本』（*Lehrbuch der Experimental-Physik*）の最初の2巻を、翌1825年には第3巻、第4巻を翻訳している。また同年にはテナールの『理論および実地化学教本』（*Lehrbuch der theoretischen und praktischen Chemie*）の第1巻を訳出した。1824/25年のみでフェヒナーが訳した本のページ数は3000を超えている。また1829年にフェヒナーは、ピオーの教科書ではまだ解決されていなかった問題を自らの実験で補い、補巻『ガルヴァニズムおよび電気化学教本』（*Lehrbuch des Galvanismus und der Elektrochemie*）として出版した。フェヒナーの仕事がいかにか徹底的で、またその量も想像を絶するものであったかがよくわかる。
 - 20 『死後の生に関する小冊子』は1836年の初版の際は匿名であった。しかし1866年に第2版が出る時、フェヒナーは本名を記すことにした。4年間の闘病の前と後では、公式なアカデミズムに対するフェヒナーの対処の仕方が異なっていることの証左の一つであると言えるであろう。
 - 21 たとえば „Beweis, daß der Mond aus Jodine bestehe“ (1821) / „Panegyrikus der jetzigen Medizin und Naturgeschichte“ (1822) / „Stapelia mixta“ (1824) / „Schutzmittel für Cholera“ (1832) / „Vier Paradoxa“ (1846) などが「ミーゼス博士」という匿名で書かれている。
 - 22 Petra Lennig: a. a. O., S. 54ff.
 - 23 Michael Heidelberger: *Die innere Seite der Natur. Gustav Theodor Fechners wissenschaftlich-philosophische Weltanschauung*. Vittorio Klostermann, Frankfurt a. M. 1993. S. 67ff.
 - 24 Julius Paul Möbius: *Neurologische Beiträge*. 2. Heft. Abel, Leipzig 1894.
 - 25 Imre Hermann: „Gustav Theodor Fechner“. In: *Imago. Zeitschrift für Anwendung der Psychoanalyse auf die Geisteswissenschaften*. 11 (4). 1925, S. 371-419.
 - 26 フェヒナーと妻のクララの間には子供はなかった。

- 27 Henri F. Ellenberger: *Die Entdeckung des Unbewußten. Geschichte und Entwicklung der dynamischen Psychiatrie von den Anfängen bis zu Janet, Freud, Adler und Jung*. Diogenes, Bern 1985. (Erste amerikanische Ausgabe 1970.)
- 28 Wolfgang Bringmann, William Balance: „Der Psychologe, der sich selbst geheilt hat. Das Leben und Werk von Gustav Theodor Fechner.“ In: *Psychologie heute*. 3 (9). 1976. S. 43-48.
- 29 ブリングマンらの診断名は「強迫症的、鬱的、心気症的アスペクトを伴った複合的神経症」(komplexe Psychoneurose mit zwanghaften, depressiven und hypochondrischen Aspekten) である。
- 30 Johannes Emil Kuntze: a. a. O., S. 114f.
- 31 Ebd., S. 114.
- 32 Christina Schröder, Harry Schröder: „Gustav Theodor Fechner (1801-1887) in seiner Lebenskrise — Versuch einer pathophysiologischen Rekonstruktion eines komplexen Krankheitsgeschehens.“ In: *Psychologie und Geschichte*. 3. 1991. S. 9-23.
- 33 Gerd Mattenklott: Nachwort. In: *Das unendliche Leben*. Hg. von Gerd Mattenklott. Mattes & Seitz. München 1984. S. 189.
- 34 そのもっとも顕著な例が『精神物理学綱要』(*Elemente der Psychophysik*; 1860) である。
- 35 Gerd Mattenklott: „Gustav Theodor Fechner. Ein deutsches Gelehrtenleben.“ In: *Fechner und die Folgen außerhalb der Naturwissenschaften*. a. a. O., S. 19.
- 36 フェヒナーの後任は、いわゆる「ゲッティンゲン七教授」の一人として1837年以来任地のなかった Wilhelm Weber であった。ヴェーバーは1849年、数学者ガウス (Gauß) の尽力で、再びゲッティンゲン大学に呼び戻されることになるが、フェヒナーはライプツィヒ大学の物理学正教授というもとの地位に戻ることを辞退した。数年にわたりこの分野から離れていたブランクのため戻る勇気がなかったこと、またやはり目の不調のため、精密な実験に耐えられないと考えたことが理由のようである。Vgl. Hans-Jürgen Arendt: *Gustav Theodor Fechner. Ein deutscher Naturwissenschaftler und Philosoph im 19. Jahrhundert*. a. a. O., S. 123.
- 37 Johannes Emil Kuntze: a. a. O., S. 140.
- 38 Ebd., S. 139.
- 39 『月の本』(Mondbuche) とは、*Nanna* に対して手ひどい批判を加えた植物学者シュライデンに対する諷刺に満ちた論駁の書、『シュライデン教授と月』(*Professor Schleiden und der Mond*; 1856) を指す。
- 40 Gustav Theodor Fechner: *Über die Seelenfrage. Ein Gang durch die sichtbare Welt, um die unsichtbare zu finden*. Zweite Auflage besorgt von Dr. Eduard Spranger. Mit einem Geleitwort von Friedrich Paulsen. Verlag von Leopold Voß. Hamburg und Leipzig 1907. S. XV.
- 41 Gustav Theodor Fechner: *Nanna oder Über das Seelenleben der Pflanzen*. Leopold Voß, Leipzig 1848. S. 391.
- 42 Ebd., S. 391f.
- 43 Ebd., S. III.
- 44 商品の流通にとって分裂国家は大きな障害となった。19世紀前半、ドイツにおいて各種の関税同盟が乱立することになったのは、少しでもこの障害を取り除くためであった。
- 45 Johannes Emil Kuntze: a. a. O., S. 194f.
- 46 Vgl. Hans-Jürgen Arendt: *Gustav Theodor Fechner. Ein deutscher Naturwissenschaftler und Philosoph im 19. Jahrhundert*. a. a. O., S. 111.

- 47 Ebd., S. 110.
- 48 Ebd., S. 110.
- 49 Gustav Theodor Fechner: *Nanna*. a. a. O., S. III.
- 50 Ebd., S. IV.
- 51 Ebd., S. VI.
- 52 Ebd., S. VIII.
- 53 Ebd., S. VIII.
- 54 Ebd., S. VIII.
- 55 自然とは何かという問題は、神とは何かを問うことに等しい。神は自然にまったく関与しないという無神論的自然観もまた、神学的問題であるからである。
- 56 Gustav Theodor Fechner: *Nanna*. a. a. O., S. X.
- 57 このような姿勢が後に「美しさとは何か」を実験によって経験的に再検証可能なものとする「実験美学」、いわゆる「下からの美学」(Ästhetik von unten) の構築にも関与した。
- 58 Gustav Theodor Fechner: *Nanna*. a. a. O., S. 3f.
- 59 Ebd., S. 4. ここでも「光」という語が用いられているが、フェヒナーの後期の著作では特に肯定的な意味が賦与されるキーワードとなっている。
- 60 Ebd., S. 4.
- 61 Mattias Jakob Schleiden (1804-1881) は最初、法律を学び弁護士として活躍していたが、のちに医学、さらに植物学を研究するという変わった経歴をもつ。Theodor Schwamm (1810-1882) とともに細胞論を打ち立てた。
- 62 Mattias Jakob Schleiden: *Studien. Populäre Vorträge*. Leipzig 1855. S. 154. Zitiert bei Hans-Jürgen Arendt: *Gustav Theodor Fechner. Ein deutscher Naturwissenschaftler und Philosoph im 19. Jahrhundert*. a. a. O., S. 121. 筆者が参照することができたのはこの講演集の1857年改定補増版であったが、そこではこれらの文言は削除されていた。あるいは版を改める際にシュライデンが批判の舌鋒をやや鈍くしたのかもしれない。
- 63 ちちなみにフェヒナーはのちにシュライデンの講演原稿を読み、大部な弁明書を書き上げている。『シュライデン博士と月』(1856) がそれである。その第4章においてフェヒナーはやはり汎神論的・汎心論的自然観を繰り返すのだが、427頁になんなんとするこの書物の詳細に立ち入ることはできない。ただ、いかにフェヒナーが徹底的な議論を好んだかがこの一書にも如実に表れていることを銘記しておきたい。なおシュライデンはライプツィヒ旅行の際フェヒナーと面会したが、両者は握手を交わして和解している (Vgl. Johannes Emil Kuntze: a. a. O., S. 231)。
- 64 Bruno Leisering: *Studien zu Fechners Metaphysik der Pflanzenseele*. Wissenschaftliche Beiträge zum Jahresbericht der Elften Städtischen Realschule zu Berlin. Weidmannsche Buchhandlung, Berlin 1907.
- 65 Gustav Theodor Fechner: *Nanna*. a. a. O., S. 38f.
- 66 Gustav Theodor Fechner: *Über die Seelenfrage*. a. a. O., S. 35ff.
- 67 Gustav Theodor Fechner: *Nanna*. a. a. O., S. 330f.
- 68 Ebd., S. 290.
- 69 Ebd., S. 290.
- 70 植物の神経そのものについてフェヒナーは繊維組織 (Faserstoff) がその役割を担ってとるのではないかという予想をしているが、科学的根拠はない。Ebd., S. 40.

- 71 Ebd., S. 13.
- 72 Ebd., S. 13.
- 73 この問題はすでにアリストテレスがその『動物誌』において直面していた問題であるが、フェヒナーにはアリストテレスへの言及は一切ない。フェヒナーにおいては、自然科学の専門書からの引用は多いが、哲学書などからの引用はほとんどなく、一般経験と自然科学的に証明済みの事実から説き起こす姿勢は一貫している。
- 74 そのほかにもフェヒナーは動物と植物の共通点として、細胞からできていること、胚珠から発生すること、呼吸し成長し、生殖をおこない、老いて死ぬことなどを挙げている。
- 75 いわゆる神経伝達物質であるドーパミン、セロトニン、アドレナリンなどの発見はまだ先の話であった。
- 76 Vgl. Michael Heidelberger: *Die innere Seite der Natur*. a. a. O., S. 18.
- 77 Gustav Theodor Fechner: *Nanna*. a. a. O., S. 59.
- 78 Ebd., S. 85.
- 79 Ebd., S. 10.
- 80 Ebd., S. 58f.
- 81 Ebd., S. 82.
- 82 その他、スマレが「おとなしい子供」、榎の木が「屈強な男」に比せられている。
- 83 古代ギリシアに遡る文芸論的性格描写や体液病理学説、また観相学 (Physiognomik) や骨相学 (Phrenologie) に由来する性格学は、18世紀においてはまだ人間学 (Anthropologie) の一部であった。最初に性格学 (Charakterologie) という用語が用いられたのは、『ナナ』よりも後の1867年、Julius Bahnsen (1830 -1881) の論文中であったとされている。『岩波哲学思想事典』第3刷、2004年参照。
- 84 Vgl. Hans-Jürgen Arendt: *Gustav Theodor Fechner. Ein deutscher Naturwissenschaftler und Philosoph im 19. Jahrhundert*. a. a. O., S. 119.
- 85 フェヒナーの神はスピノザの神に限りなく近づくことになるが、この大きな問題については稿を改めて論じる。
- 86 Gustav Theodor Fechner: *Nanna*. a. a. O., S. 196f.
- 87 Vgl. Bruno Leisering: a. a. O., S. 24.
- 88 Gustav Theodor Fechner: *Nanna*. a. a. O., S. 388.
- 89 Vgl. Hans-Jürgen Arendt: *Gustav Theodor Fechner. Ein deutscher Naturwissenschaftler und Philosoph im 19. Jahrhundert*. a. a. O., S. 120f.
- 90 Ebd., S. 122.
- 91 Hans Werner Ingensiep: *Geschichte der Pflanzenseele*. Kröner, Stuttgart 2001. S. 427ff.
- 92 ただし一般に存在を証明するより不在を証明する方が困難である。つまり「植物に魂がない」ことは明証的に示し難く、したがってもしかしたら魂があるのではないかという仮説の方が構造的に有利にならざるを得ないのではないか。
- 93 Hans-Jürgen Arendt: *Gustav Theodor Fechner. Ein deutscher Naturwissenschaftler und Philosoph im 19. Jahrhundert*. a. a. O., S. 120.
- 94 Gerd Mattenklott: „Gustav Theodor Fechner. Ein deutsches Gelehrtenleben.“ In: a. a. O., S. 17.
- 95 Michael Heidelberger: a. a. O., S. 76.
- 96 Google books による検索では vielleicht が40例、möglicherweise が4例、warum sollte nicht (warum

sollte es [...] anderes 等も含む) が7例であった。

- 97 Heinrich Adolf: *Die Weltanschauung Gustav Theodor Fechners*. Verlag Strecker und Schröder. Stuttgart 1923. S. 55.

なお本稿は科学研究費補助金基盤研究(C)「モデルネにおける神秘主義のポテンツ — グスターフ・テオドール・フェヒナーの系譜」(課題番号20520293)の成果の一部である。

Der „Zwiespalt“ der Moderne bei Gustav Theodor Fechner

— Gustav Theodor Fechner und seine Genealogie (2) —

Keita FUKUMOTO

Das Ziel des vorliegenden Aufsatzes ist es, Gustav Theodor Fechner (1801-1887) als einen eigentümlichen Denker zu profilieren, der den „Zwiespalt“ zwischen den damaligen Geisteswissenschaften ([Natur]-philosophie, Seelenkunde (Psychologie), Theologie usw.) und den Naturwissenschaften (hauptsächlich Physik) überwinden und beide Prinzipien integrieren wollte. Anders gesagt, werde ich versuchen, Fechner als einen mystisch-pantheistisch-panpsychistischen Naturphilosophen *und gleichzeitig* als streng experimentellen Naturwissenschaftler zu charakterisieren.

Im Vergleich mit der eher materialistisch-mechanischen Weltanschauung in Frankreich, wo die Deutung der Natur von Descartes und Newton durch Enzyklopädisten wie Diderot und d'Alembert intensiviert wurde, herrschte in Deutschland eine organistisch-idealistische Weltanschauung, deren Vertreter wir z. B. bei Lorenz Oken und G. Fr. Schelling finden können. Der „Zwiespalt“ der Moderne hieße hier der zwischen jener „positivistischen Naturwissenschaft“ und dieser „romantisch-idealistischen Naturphilosophie“. Fechner, der akademischer Physiker war, hatte von Natur aus eine mystisch-religiöse Neigung und las in seinen jungen Jahren Oken und Schelling. Er sah anfangs jedoch keinen Weg, wie er diese beiden Prinzipien unwidersprüchlich integrieren könnte. Fechner beschreibt seine damaligen Gedanken folgendermaßen: „Es schied sich mein Inneres gewissermaßen in zwei Theile, in mein Ich und in die Gedanken. Beide kämpften miteinander; die Gedanken suchten mein Ich zu überwältigen und einen selbstmächtigen, dessen Freiheit und Gesundheit zerstörenden Gang zu nehmen [...]. Meine geistige Beschäftigung bestand statt im Denken, in einem beständigen Bannen und Zügeln von Gedanken.“

Fechner erkrankte dann sowohl physisch als auch psychisch schwer und musste sich 4 Jahre lang wie eine Puppe in einem dunklen Zimmer einkapseln. Nach 4 Jahren aber wurde er wie durch ein „Wunder“ wieder gesund. Durch diese urplötzliche Selbstheilung seiner schweren Krankheit überkam ihn die harmonische Vision der Natur. Davon erzählte er wie folgt: „Gar wohl erinnere ich mich noch, welchen Eindruck es auf mich machte, als ich nach mehrjähriger Augenkrankheit zum erstenmale wieder aus dem dunklen Zimmer ohne Binde vor den Augen in den blühenden Garten trat. Das schien mir ein Anblick schön über das Menschliche hinaus, jede Blume leuchtete mir entgegen in eigenthümlicher Klarheit, als wenn sie in's äußere Licht etwas von eigenem Lichte würfe. Der ganze Garten schien mir selber wie verklärt, als wenn nicht ich, sondern die Natur neu erstanden wäre [...].“

Nach seiner Genesung schreibt Fechner wie ein Besessener seine visionären Naturdeutungen. Hier werde ich sein Buch „*Nanna oder Über das Seelenleben der Pflanzen*“ (1848) ausführlich erörtern, in dem Fechner sich fragt, ob die Pflanzen beseelt seien oder nicht.